

Title	1年生のための経済原論
Sub Title	
Author	吉野, 直行
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1996
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.88, No.4 (1996. 1) ,p.626(124)- 627(125)
JaLC DOI	10.14991/001.19960101-0124
Abstract	
Notes	読書案内
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19960101-0124

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

読書案内

1年生のための経済原論

吉野直行

慶應義塾大学経済学部では、日吉の1年生と2年生に、近代経済理論の立場から経済原論1（マクロ経済学）、経済原論2（ミクロ経済学）の講義が行われています。講義を聞きながら、以下に挙げるテキストを読むことによって、いろいろな角度から経済原論を学ぶことができます。

高校生までの勉強と大学での勉強との違いは、同じ経済原論でも、それぞれのテキストによって、或いは先生によって説明の仕方が異なり、経済問題に対する回答も、正解が一つだけあるわけではありません。複雑に絡み合う現実経済の動きは、理論の仮定、制度的な構造の違いによって異なった結論を導くことにもなるわけで、経済学の勉強で大切なことは、考え方の道筋をしっかりと勉強することにあると思います。

答えが一つだけならば、景気の低迷・産業や金融の空洞化に対して、処方箋は簡単に見つけられる筈です。摩擦のない真空の世界を想定できる自然科学と違って、社会科学の一分野である経済学は、人々の日常行動・企業行動・経済政策・海外要因など、われわれ人間のさまざまな経済活動が複雑に絡まり合いながら動いている現実の経済を対象としていますから、純粋なモデル分析だけでは、現実経済の動きを100%説明できません。いくつかの仮定のもとに経済理論モデルを構築して解答を求めることによって、現実経済の動きを抽象化して考える力が養えます。特に皆さんが卒業後に実務社会に出ると、現実の動きをある程度抽象化して見る能力が必ず必要になりますから、経済理論をしっかりと勉強しておくことは大切です。経済理論の勉強と同時に、現実経済の動きを統計データから理解し、理論と現実の対応を勉強できるようになることも1年生の皆さんに期待します。

経済原論1（マクロ経済学）

原論1（マクロ経済学）のベストセラーは、中谷巖著『入門マクロ経済学』（日本評論社）であり、アメリカのドーンブッシュ・フィッシャーのマクロエコノミックスと類似レベルであるが、説明の

仕方が不十分な箇所も見られる。浅子和美・加納悟・倉沢資成著『マクロ経済学』（新世社）は、比較的コンパクトにまとまったテキストで、説明も厳密になされている。浅子和美・吉野直行編著『入門マクロ経済学』（有斐閣）は、最近のマクロ理論の展開と応用編での日本経済のマクロ経済分析を説明している点に特色があるが、一部にやや難しい章もあるので、元気のある1年生のチャレンジが必要である。新保生二著『ゼミナールマクロ経済学入門』はマクロ経済と現実の日本経済との対応を考えたい学生に合った書物である。さらに、高度なマクロ経済理論へと進みたい学生には、細田衛士著『経済変動論』（慶應通信）がある。

経済原論2（ミクロ経済学）

ミクロ経済学を数式を使わずに、図やグラフで主に説明する、倉沢資成著『入門・価格理論』（日本評論社）と岩田規久男著『ゼミナールミクロ経済入門』（日本経済新聞社）は、日常生活や実際の経済政策を例にとって明快な解説がなされる。最近のミクロ理論で使われるゲーム理論や情報の不完全性も取り入れているテキストとしては、スティグリッツ著（藪下史郎訳）『入門経済学』（東洋経済新報社）と石井安憲・西條辰義・塩沢修平著『入門ミクロ経済学』（有斐閣）、西村和雄著『ミクロ経済学入門』（岩波書店）の3冊が上げられる。後者は、中級レベルのミクロ経済学まで含んだ入門書であり、よく考えながら数式展開を読み進むことによって、ミクロ経済学を深く理解することができる。さらに、高度なミクロ理論を勉強しようとする人には、川又邦雄著『市場機構と経済厚生』（創文社）がある。

高校時代のように、毎日宿題が出される訳ではありませんから、自分から学ぼうとする意欲がなく、期末試験だけのための勉強をしていては、4年間での伸びはあまり期待できません。いつも疑問を抱きながら、講義を聞き、自分で考える訓練をすることが望まれます。悔いのない大学生活を送られることを希望します。

（経済学部教授）